

# 土佐のわらべ

第399号 《第421回（2014. 11. 13）子どもの本の読書会記録》参加者6人・文書参加6人

## 『思い出のマーニー』 ジョーン・ロビンソン／作 松野正子／訳 岩波書店

本棚にひっそりと存在していた本が、ジブリの映画化で注目を浴びました。本屋に平積みされ新訳もできました。でも、子どもたちに読んで貰うのは中々難しいようです。

主人公のアンナは問題を抱えた子どもです。養母を“おばちゃん”と呼んで一線を引いているし、友達がなくて一人ぼっちでも平気だし、自分から何も取り組もうとしません。そんな無気力で無表情なアンナが、療養先の田舎で一人の少女に出会ってから変わっていきます。誰も住んでいないような“しめっ地やしき”に住んでいるというマーニーは、本当に存在するの？と思わせる不思議な少女で、物語の前半は幻想的でもあります。マーニーと秘密の友達になったアンナは、今まで見ようとしなかった自分の心と向き合うようになります。

しかし、マーニーは突然消えてしまいアンナはまた一人ぼっちになってしまいます。でも、アンナは以前のアンナではありません。後半では、マーニーと出会うことで精神的に成長したアンナが、“しめっ地やしき”にやって来たリンゼー一家の子どもたちと友達になり、楽しい日々を過ごす様子が描かれています。リンゼー一家に打ち解けたアンナは、前半のアンナとはまるで別人のようです。

そして最後に“しめっ地やしき”のマーニーの秘密が解き明かされます。親に愛されることのない孤独な子ども時代を過ごしたマーニーは、大人になってからも我が子に上手く愛情を注ぐことが出来ませんでした。その上、愛したいと願った幼い孫娘を残して死んでしまいます。“しめっ地やしき”はマーニーの思いを全部見てきました。“しめっ地やしき”が時を超え、マーニーの愛をアンナに届けてくれたのだと私は思っています。

私は大人になってからこの本を読みました。そのためか、子どもにとって愛されていると信じられることが大きな意味を持つのだということが心に残りました。自分の居場所、戻る場所があってこそ大きく羽ばたくことが出来るのだと…。でも、出来れば思春期の頃、この本に出会いたかったです。友だちや周りの大人との距離の取り方に悩む子どもは、今も沢山いると思います。その子どもたちの心の糸に触れることの出来る本だと思うのですが…。

この本はアンナの成長物語で、最後に希望を感じる児童文学らしい作品です。時間がゆったりと流れていき、何事にもお

おらかで、子どもたちは自由に休暇を楽しんでいます。背景の自然も素晴らしく、登場人物の大人も皆いい人です。それに加えミステリーっぽくもありタイムスリップ的でもあり、私好みで盛りだくさんの宝物のような一冊なのです。

この本が書かれて50年近く。イギリスでは殆ど読まれることがなくなったようですが、日本では何時までも読み継がれますように。

### 参加者の感想

- ・秘密を解き明かしていく感がある。
- ・アンナの心の葛藤が生み出すマーニーとの世界。この過程が無いと現実の子どもを好きになれないのだろう。アンナは幻想と生きながら現実と向かい合う力をつけている。
- ・思春期の子どもがこの本を読むとよく分かると思う。
- ・マーニーと出会う幻想の場面は“しめっ地やしき”の力ではないか。マーニーが住んでいる頃、この家の主人はマーニー。寂しいマーニーのために、やしきが奇跡を起こしてくれたのだと思う。
- ・最後にアンナが前向きで、子どもらしく、自分で生きていこうとなるところは、子どもの本はこうでなくちゃ！と感じた。
- ・読み終わって強く感じたことは、アンナの周りの人が、とっても優しくいい人ばかりだということ。ほっとする本でした。
- ・子どもたちがこの本を読んだ時、読み進めていけるか心配。アンナの気持ちを共有していくのは少し重たいかな。
- ・自分が思春期だった頃が思い出されて、懐かしく感じた。
- ・アンナが周囲と自分を意識して感じていることは、共感できる部分がある。例えば、友だちに誘われなくても平気なことや、他の人は“内側の人”で自分はその“外側”にいたりしていること。
- ・“内にいても外”という感覚に共感する生徒は多いと思うのだけど、ジブリで映画化されても中学生があまり読まないのは残念。
- ・やしきの裏側と表側の二面性に気付き、驚き、それでもこの二面性を理解したアンナが、人間関係においても同じことだと受け入れて成長していく様子が見られ、とても明るく、希望が持てる終わり方だなと思った。 (R. S)